

秋田のグリーン・ツーリズム事情

秋田県農林水産部 農山村振興課
主任 泉谷 衆

1. グリーン・ツーリズムとは
2. 秋田のグリーン・ツーリズムの状況
3. 大学生にとってのグリーン・ツーリズム
4. 動き出した大学生たち

1. グリーン・ツーリズムとは

1-1 「人と人との出会い」が楽しいグリーン・ツーリズム

「グリーン・ツーリズム」はまだ一般的には知られていない言葉ですが、簡単に言うと「農山漁村などに長く滞在し、農林漁業体験やその地域の自然や文化に触れ、地元の人々との交流を楽しむ旅」ということとなります。

もともとは長期バカンスを楽しむことのできるヨーロッパ諸国で普及した旅のスタイルですが、日本では最近「新しい旅のカチ」として関心を集めてきており、ヨーロッパのまねごとではない「日本型」のグリーン・ツーリズムが広まりつつあります。

ひとつの場所に長く滞在し、様々な田舎暮らし体験

単なる観光旅行とは異なり、手に入れる感動もより深く大きい

グリーン・ツーリズムの大きな魅力です

1. グリーン・ツーリズムとは

1-2 都市からの訪問者にとってのグリーン・ツーリズム

グリーン・ツーリズムでは、訪れる人と、滞在先の人々との交流がとても大切なものになります。都市で生活する人にとっては、体験メニューで行う作業のひとつひとつが、地元の人々の豊富な経験と知恵に裏打ちされた手助けなしには上手く出来ないことに驚くはずですが、例えば種まきから収穫まで繰り返し訪問するような農業体験では、一年を通じて地元の人々との交流が生まれ、そこが第二のふるさと的な存在にもなります。

もちろん、やみくもに体験するだけではなく、「ただ田舎でソノビソノする」のもいいのですが、都市の喧騒を忘れ、ゆったりとした自然の中に身を置いてみれば、新しい自分に出会えるかも知れません。

農林漁業体験・農山漁村生活を体験するだけじゃない

そこに人との出会いがあるからより深く楽しいんだ

あなた型のグリーン・ツーリズムをみつけよう

1. グリーン・ツーリズムとは

1-3 農林漁業者にとってのグリーン・ツーリズム

グリーン・ツーリズムを受け入れる担い手となるのは、主として農山漁村に生活する農林漁業者であるため、もちろん主たる収入はそれぞれが生業としている農林漁業であり、そこに軸足が置かれていることを忘れてはなりません。
しかし、生産の場である農山漁村に副業的なグリーン・ツーリズムの要素を加えていくことで、下記のような効果を期待することができるようになります。

- ① 美しく自然豊かな農山漁村の整備と保全
- ② 農山漁村の地域社会の活性化
- ③ 農山漁村の地域経済の活性化
- ④ 地域の再発見と地域資源の有効活用
- ⑤ 高齢者や女性の活躍する場の創出

1. グリーン・ツーリズムとは

1-4 グリーン・ツーリズムいろいろ



1. グリーン・ツーリズムとは

1-4 グリーン・ツーリズムいろいろ



2. 秋田のグリーン・ツーリズムの状況

2-1 秋田のグリーン・ツーリズム推進体制

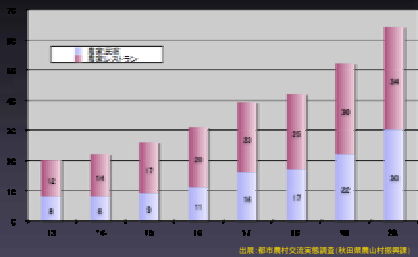
秋田県では、県と秋田花まるっグリーン・ツーリズム推進協議会が推進役を担っています



2. 秋田のグリーン・ツーリズムの状況

2-2 秋田のグリーン・ツーリズム開業者の推移

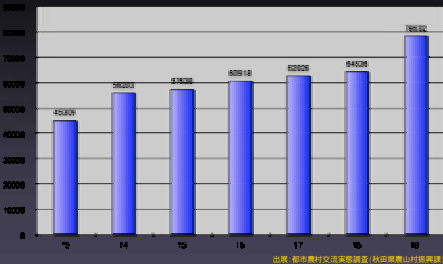
農家民宿・農家レストランは、農家民宿県内第1号の西木村「泰山堂」が平成8年に開業して以来、着実に増加してきています。また、平成19年度の農家民宿宿泊者は7,734人(30軒中18軒分のもの)です。



2. 秋田のグリーン・ツーリズムの状況

2-3 秋田のグリーン・ツーリズム訪問者(都市農村交流者数)の推移

都市農村交流者数は、「ゆとり」や「やすらぎ」などの豊かさを求める価値観の増大等を背景にして、増加傾向が続いています。



2. 秋田のグリーン・ツーリズムの状況

2-3 秋田の体験型教育旅行(修学旅行)の受入について

秋田県内で修学旅行の受け入れ活動で中心的な役割を担ってきたのは仙北市の「たざわこ芸術村(わらび座)」と「NPO法人 田沢湖ふるさとふれあい協議会(ふれ協)」です。

「わらび座」は、学校と農家の橋渡し役を30年以上続けてきており、関わる受入農家は仙北市田沢湖地区を始め、「グリーン・ツーリズム西木研究会」、大仙市、横手市、北秋田市などにまで及んでいます。

また、「ふれ協」は、わらび座とほぼ同時期の昭和50年代から田沢湖畔に近い石神地区の民宿などを中心に修学旅行の受入を始めたグループがルーツで、平成10年に協議会を設立、平成14年にはNPO法人化を果たしています。

H19の教育旅行等は、田沢湖地域を中心に全県で延べ143校9,674人を受入。
(学校地域別割合:県内47% 東北25% 関東15% 北海道10% 中部・近畿・九州各1% 中四0%)

H19の教育旅行等での民泊受入を実施した農林漁家は128件。
(市町村別件数:大仙市50軒 仙北市30軒 横手市25軒 鹿角市20軒 大館市18軒 美郷町10軒)

出展 都市農村交流実態調査(秋田県農山村振興課)

3. 大学生にとってのグリーン・ツーリズム

3-1 秋田県内の大学生について

- 1) 秋田市内の大学生の存在感が稀薄
- 2) 大学を超えた学生同士の交流があまり見えない
- 3) 秋田市内4つの大学の県外出身者は約5割強で、ほとんどが卒業後は離秋



秋田で過ごした4(6)年間は、心にどれほど強く焼きついただろうか？
また遊びに帰ってきたいと思うだろうか？

3. 大学生にとってのグリーン・ツーリズム

3-1 秋田県内の大学生について

「私には秋田にもうひとつのふるさとがある。
あの集落に行けば、あのばあちゃんに会える。
私を待っていてくれる人達が秋田にもいる。」

そういう思いを、そういう経験をしてほしい。

3. 大学生にとってのグリーン・ツーリズム

3-2 秋田県内の大学生を待っているグリーン・ツーリズム

- 1) 若者がどんどん流出し、過疎化高齢化
- 2) 労働力の不足だけでなく、若さそのものとの触れあう機会があまりなく、精神的にも疲弊している感



このままムラはしぼんでいってしまうのだろうか？
長く培われてきた技術や文化は絶えてしまうのだろうか？
「日本人の原風景・ふるさと」と言う名の下で没個性化？
……
誰かその価値を見いだしてはくれないだろうか？

3. 大学生にとってのグリーン・ツーリズム

3-2 秋田県内の大学生を待っているグリーン・ツーリズム

「農作業や山仕事の労働力としてだけでなく、
ムラの技術や味や生活そのものを評価してくれて、
自分の存在を頼って将来的にも遊びに来てくれる」

そんな、もう一人の子や孫のような存在になってほしい。

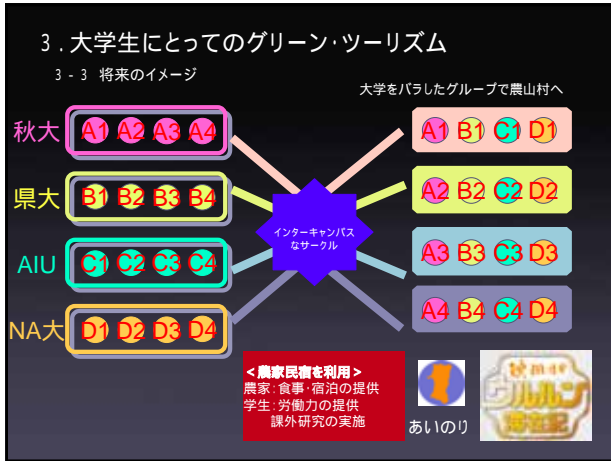
3. 大学生にとってのグリーン・ツーリズム

3-3 将来のイメージ

仲間と泊まりに行く
ホラハイトする
サークルやゼミの合宿で使う
親や兄弟を連れて行く
(というか親のお金で農家民宿に泊まる)
大学間の壁を超えた交流の場として
……いろいろな関わり方が想像できます。

学生生活に





- ### 4. 動き出した大学生たち
- 4-1 子どもの遊び相手と農村体験 1/12-13(仙北市)
(秋田県立大学・秋田大学・国際教養大学)
 - 4-2 農家民宿の手伝いを通じて 4/12-13(仙北市)
(秋田大学・国際教養大学)
 - 4-3 農家林家の手伝いを通じて 4/13(大仙市)
(秋田大学・国際教養大学)
 - 4-4 田植え体験を通じて 5/18(横手市)
(国際教養大学)